



【写真1】
大正13(1924)年の土浦幼稚園児



【写真2】
縫取(第十二恩物繡紙法)の園児作品
小さな穴のある紙に色系を通して模様を描いたものです。

大正13年の

土浦幼稚園児の保育風景

着物に白いエプロン姿の子どもたちがじつと目を閉じて、静かに椅子に座っています。瞑想の時間でしようか。時計の針は10時10分をさしています。

写真1は大正13(1924)年の土浦幼稚園児です。土浦幼稚園は茨城県で最初の幼稚園で、明治18(1885)年に土浦西小学校(土浦小学校の前身)の附属幼稚園として開園しました。最初の入園は6人のみでしたが、大正12年3月の卒園生は130人に増えています。13年には小学校の校舎が増築するのにあわせ、園舎が新築されました。写真1の部屋は新築以前の平屋建ての旧園舎の保育室のようです。

壁には時計のほかに、張り紙のようなものが2枚掛かっています。これは幼稚園手技掛図といって、恩物の使い方の見本を示してあるものです。恩物とは幼稚園児の遊具として、ドイツの教育者で世界最初の幼稚園の創設者でもあるフレデリック・フレーベル(1782~1852年)が考案したものです。フレーベルは、幼児の活動はすべて形・大きさ・色・数をもつ周囲の事物と深い関連の中にあると考えました。幼児がこれらの基本的要素を認識するために、恩物は考え出されたものでした。

写真1の掛図には、積木や色板を並べて汽車や船などを形作った見本が描かれています。『創立百周年記念誌』の中で、大正9年に入園

した保立俊一さんは「教育はフレーベルの教授法、主に細かい手作業が多かった。紙差し、縫取(写真2)、豆工法、折り紙など、恩物といわれる品物を使つての作業をよくした。子どもの手になつたものと思えない見事な作品もあつた」と述べています。さらに、オルガンで歌をうたつたり、遊戯をしたこと、亀城公園の木立ちや草むらは絶好の遊び場であつたと続けています。

また、猪俣まささん(大正12年から昭和20年まで土浦幼稚園教諭)は「太鼓の合図でお部屋に入り静かなリズムにあわせて、一時眼を閉じます。これは毎日いたしました」と記しています。写真1はそのときのものと考えられます。保育の詳細はよくわかつてはいませんが、静と動、緊張と解放がバランスよく組み込まれていた保育の一端が垣間見られるのではないのでしょうか。

写真1の時計と掛図は、現在も土浦幼稚園に伝わっています。3月20日(土)から開催される特別展「幼児教育コトハジメ」(詳細は「広報つちうら」3月上旬号でご案内します)で展示します。ぜひご覧ください。2月中は、幼稚園児の恩物作品(縫取)を博物館2階展示室3でご覧いただけます。

園市立博物館(☎824・2928)